地域教育情報紙
（令和４年度）
第 ３ 号

風と光と

令和４年９月２０日発行
《担当》富士･東部教育事務所
教育支援スタッフ
土屋義寛 ・ 野澤今日太・河西秀章

『 風と光と 』は、富士･東部地域教育の様々な活動、情報等を掲載し、

地域教育の**「横の連携」**と**「縦の接続」**

を目指す富士･東部教育事務所が発行する情報紙です。１年に6回程度の発行を予定しています。

第１回南北都留教育相談ネットワーク会議

７月7日（木）に、富士・東部教育事務所主催の南北都留教育相談ネットワーク会議（会長 都留児童相談所 小林豊子 所長）が開催されました。この会議は南北都留の教育相談員、SC、SSWの先生方で構成され、子どもたちの学校生活を連携して支援することを目的とし、年３回行われます。

今回の第１回は、ひばりが丘高等学校の渡辺孝太朗先生による「通級による指導」の実践提案と討議を行い、ひばりが丘高校の職員一体となって実践されている「ライフ・スキル」の発表が行われました。「ライフ・スキル」はⅠとⅡで構成されています。Ⅰでは、個別指導が中心で、アンガー・マネジメントなどソーシャルスキルの基礎の習得を目指します。Ⅱでは、小集団での指導による、協働的な活動内容となっています。座学だけでなく、考えて行動する体験活動を取り入れて指導し、そのための教材開発にも力を入れているそうです。また、生徒たちが自信をもってプレゼンテーションができるためのモデリングなど、工夫を凝らした授業構成がされているそうです。最後に、都留文科大学の中川佳子先生による指導・助言がありました。

当ネットワーク会議においては、教育機関との連携を通し、生徒のニーズに応じた指導の向上に努めています。さらに充実した授業の構築をめざし、今後も様々な意見交換を行っていく予定です。

チャレンジ！上高アニマシオン

８月２日（火）に上野原高校（棚橋雅一校長）にて「チャレンジ！上高アニマシオン」が開催されました。アニマシオンとは、ゲーム形式で参加者同士がコミュニケーションを取りながら進める読書会です。全部で７５のプログラムがありますが、今回はその中で、「前かな、後ろかな？」と「彼を弁護します」の２つを実施しました。

当日参加した北都留地区中学生８名と上野原高校生８名の全員が指定図書「黄色い目の魚」（佐藤多佳子著）を事前に読み込んでおきました。「前かな、後ろかな？」では、ランダムに並べられた抜粋してある作品の中の一節やセリフを指定図書と同じ順序になるように並べ替えていきました。「彼を弁護します」では、各自が作品の中の登場人物になりきり、他の参加者からの「どうしてあなたはあのような行動をとったのですか？」等の質問に答え、登場人物の気持ちを代弁していきました。

作品を深く読み込み、表面的な意味だけでなく、その言葉の裏に隠された登場人物の心境を理解する必要がありました。その上で、アニマシオンを進めるにしたがって、自分の理解した心境と他の参加者が理解していた心境との違いに気づき、言葉が持つ意味の奥深さに気づかされました。読書への興味がさらに深まった１日となりました。

シオジ森の学校　植物観察会

次回の予定　１０月２９日（土）秋のトレッキング

７月３０日（土）に「シオジ森の学校　植物観察会」が行われました。講師は井上敬子先生で、「シオジの森で樹木の赤ちゃんを探そう」をテーマにして行われました。

猛暑日であるにもかかわらず、大峠の気温は２５℃。ひんやりとした空気がさわやかななかで、シオジやブナ、カエデなどの実生（種から発芽したての様子）を観察しました。シオジの実生が見られるのはこの時期だけだそうです。「オノオレカンバやブナ、ミズナラの木があるでしょ。生えている木の種類によって標高がどれくらいかわかるんだ」「ブナは木材としては使いづらいけど、水を貯え、土壌を良くして森を守っているんだ」「木の幹にクマの爪痕があるよ。クマが木に登ってブナの実を食べた跡だね」など、山の中の様々な植物や生態系の説明も講師の先生方から聞くことができました。また、植林されたカラマツ林と自然に育った林を見比べて、森の働きを学習することもできました。さらに、珍しいヤママユの幼虫も発見！初めて見るきれいな虫の幼虫に歓声が上がるなど、豊かな森の中にはたくさんの発見がありました。

シカによる食害で危機的な状態ではありますが、シオジの森の生態系を維持していかなければなりません。シオジの森がこれからどんな森になっていくのかをみんなで考えた一日となりました。

次回の予定について、詳しくは誠実堂（０５５４－２２－２７７５）まで！

「先進的教育活動モデル事業」　道志中学校公開研究会

７月１３日（水）に、道志中学校（杉本賢二校長）にて、先進的教育活動モデル事業公開研究会が行われました。多くの参加者のもと、午前中に国語と英語の授業、午後は道志中学校の実践発表とWEB QU 活用についての研究協議及び講演会が行われました。

国語と英語の授業においては、ともに「お手紙・The Letter」を教材に学習指導を行いました。国語の授業では、作品を読み、感じたことを発表・話し合うという形式で進みました。あるグループでは、日本語訳と英語訳を比較して、「英語ではすべて”look out of the window”なのに日本語では『見る』や『のぞく』と訳されている。言葉は状況によって捉え方が変わり、表現も変わるところが面白い」という気づきから、「だからこそ言葉使いには非常に気をつけないといけない。知らないうちに相手を傷つけることがあるから」という学びへとつながりました。英語の授業では、自分の好きな登場人物・場面などを英語で表現し相手に伝える学習を行いました。話し手は、なぜ好きなのかしっかりと理由づけをしながら相手に伝えようとする。また、聞き手も相手の言っていることを理解しようとする。お互いがなんとか英語でコミュニケーションを成立させようとしていました。なかなか言葉が出てこなくて言いたいことが言えなかった時は、どういう言い方をしたらよいかをお互いに話し合い、表現の幅を広げていきました。

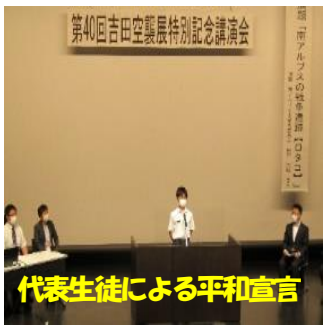
両方とも非常にアクティブな授業で、自分の考えを発表する形をとっていましたが、生徒たちは自信をもって大きな声で自分の考えを発表し、また、他の生徒はしっかりと聞いていました。自分の考えを聞いてもらえる安心感、しっかりと相手の考えに耳を傾け、それを尊重する姿勢。また、わからないときは一緒に答えを探していく協働性。非常に良い雰囲気のなかでの授業でした。

午後の講演会では、早稲田大学教育学部教授 河村茂雄先生から「新学習指導要領・コロナ禍の教育・様々な教育課題への対応として、WEB QU を活用して安定していながら活性化できる学級集団の重要性」という演題で講演をして頂きました。「『主体的・対話的で深い学び』の実現のためにはグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等のアクティブラーニングの必要性が高くなる。もし学級内の役割が固定していて、一部の生徒が常にリーダーシップを発揮しているような状態ならば、『主体的・対話的で深い学び』のなかでは、常に発言力のある生徒の学力しか伸ばせなくなる」という言葉が印象に残りました。学校という学習環境において、一定のルールを共有しつつ、リーダーとなる生徒をローテーションで代えていくことによっておとなしい生徒にもリーダーとなる機会を作り、同時に周りの生徒たちが能動的にフォロアーシップを発揮できる環境を整えることがいかに大切なのかということでした。

第４０回　吉田空襲展　～未来につなげる　吉田空襲の記憶～

７月２２日（金）～２４日（日）まで富士吉田市市民会館にて第４０回吉田空襲展が開催されました。主催者は、戦争を知らない世代が増えてきているなか、これからの日本を担っていく世代に、過去、現在の戦争の事実から、平和の大切さ・命の尊さについて考え、伝えていけるように、この吉田空襲展を１９８３年より開催してきました。期間中は、記念特別講演、パネル写真展示、戦時中の生活用品展示、各小中学校児童生徒の作品、吉田空襲関係の資料と展示物、支援学校の生徒の作品展示、フィールドワーク、戦争や平和に関する図書コーナー、親子映画会、読み聞かせ会等、非常に多くのアプローチで児童生徒の心に訴えかけました。

特別記念講演では、南アルプス市教育委員会 田中大輔氏から『南アルプスの践祚（せんそ）遺跡【ロタコ】』という演題で講演をして頂きました。終戦間際に南アルプス市で飛行場が秘密裏に建設されていたという事実に驚くとともに、「実際に戦争を経験した人が少なくなってきているからこそ、残っている遺跡に触れることによって戦争をリアルに感じてほしい」との言葉が印象的でした。その後おこなわれた実際に空襲の現場となった跡地を巡るフィールドワークでは、約３０名の小中学生が参加しました。「世界のどこかの空襲で何百人、何千人が亡くなったっていう話を聞くと、吉田空襲の１２名（死亡者）という数が少なく思われるかもしれない。だけどそれって私たちの感覚が麻痺してしまっていませんか？人の命の価値って変わりませんよね？」フィールドワークで案内をして頂いたある中学校の先生の言葉が忘れられません。



代表生徒による平和宣言

フィールドワーク

献花式

夏休みわくわく体験特集

① 帝京科学の夏祭り　at　帝京科学大

モルモットへの餌やり

帝京科学大学（冲永荘八学長）と北都留地域教育推進連絡協議会（会長：小林信保大月市長）は、７月２４日(日)に第１９回「帝京科学の夏まつり」を帝京科学大学東京西キャンパス（上野原市）にて開催しました。

当日は北都留地区の子どもたち約１５０名の子どもや保護者が参加しました。３つのプログラムに２０コースが開講されました。帝京科学大学のアニマルサイエンス学科やこども学科の学生約９０名が、趣向を凝らした体験コーナーを用意し、参加した子どもたちにわかりやすく、丁寧に対応していました。参加者は、ブロッコリーを使ってDNAを抽出するなどの様々な実験や工作活動に挑戦したり、ヘビや子ブタとふれ合ったりカメやモルモットに餌やりを経験しました。また、夜の観測会では旧桜井小学校の屋上で「とびこめ虫嵐!!」のテーマのもと、照明器具を使いカブトムシ等を集めました。

朝から夜まで様々なところで子どもたちの笑顔がはじけた一日となりました。

カメとのふれあい

ブロッコリーからDNA抽出

野生生物観察会（夜の部）

② 親子カルチャー教室　at　富士北稜高

７月２３日（土）に、富士北稜高校（塩入由里校長）にて「親子カルチャー教室」が実施されました。「親子でオリジナルカレンダーをつくろう」「親子で体をうごかそう」「親子でブックスタンドをつくろう」の３つのプログラムに、南都留地区（除く：都留市・西桂町・道志村）の小学生とその保護者の合計２４名が参加しました。「ミニ先生」として富士北稜高校生１２名も参加。先生役として小学生の子どもたちと一緒に体をうごかしたりモノづくりをおこなってくれました。

オリジナルカレンダー作りでは、各自の携帯に保存されている写真のデータをパソコンの中に取り入れて、さらに自分の予定を書き入れていきながら作成しました。体をうごかすプログラムでは、ボール遊びやバドミントンだけでなくウェイトリフティングにも挑戦！県下でもウェイトリフティング部がある高校は数校しかなく、まさに富士北稜高校でしか出来ない体験となりました。ブックスタンド作りでは、木材に穴をあけたり釘を打ちつけたりして、スライド式のブックスタンドを作りました。非常にしっかりとしたブックスタンドで、大人になっても使えそうなものでした。

終了後のアンケートには、保護者の方からの「親子で触れ合える、とてもよい機会となりました」という意見がたくさんありました。子ども達にとっても夏休みの思い出となるよい機会になったと思います。

③ 親子ふれあい体験教室　at　都留興譲館高

８月１１日（木）に、都留興譲館高校（小佐野景賀校長）にて「親子ふれあい体験教室」が開催されました。都留市・西桂町・道志村内の小学４年生～６年生までの児童とその保護者の合計２２名の参加者が、「燃料電池カーの製作」「デジタル時計の製作」「メタルプレートの製作」「透明樹脂を用いたアクセサリーの製作及び電子顕微鏡観察体験」に取り組みました。「ミニ先生」として都留興譲館高校生１５名も参加。先生役として小学生の子どもたちと一緒にモノづくりをおこなってくれました。

「燃料電池カーの製作」では、４つのタイヤでデコボコ道でも力強く進む４WD カーを作りました。動くためのエネルギー源はマグネシウム燃料電池で、塩水を垂らして発電し動き始めると歓声が上がっていました。「デジタル時計の製作」ではハンダ付けを行いながら作りました。ハンダ付けをやったことがない子が多く、ミニ先生がやさしくサポートしていました。「メタルプレートの製作」では、パソコンでイラストや文字をデザインし、オリジナルのプレートを作りました。自分の名前や好きな言葉を入れ、世界に一つしかないピカピカのプレートが出来上がりました。「アクセサリーの製作及び電子顕微鏡観察体験」では、紫外線を当てると透明に固まる樹脂を使い、オリジナルのアクセサリーを作りました。また、電子顕微鏡観察体験では、普段体験できない電子顕微鏡の使い方と観察を体験しました。

事後アンケートの保護者のコメントです。

「先生とミニ先生が尽力下さり、デジタル時計が完成出来、嬉しかったです。子どもがハンダゴテを使い、ハンダ付けをスムーズに行っている姿を見て、驚きと共に成長を感じました。貴重な機会を作って下さり、ありがとうございました。」

このようなコメントをいただき、参加者だけでなく、主催者にとっても本当に良い一日になりました。

④「小学生ものづくりフェスタ」
at 産業技術短期大学校都留キャンパス

８月２０日（土）に、産業技術短期大学校都留キャンパス（飯島慶一郎事務局次長）にて「小学生ものづくりフェスタ」が開催されました。１３名の小学生たちが、低学年用の『かざぐるまで電気を作ろう！』と高学年用の『「あんどくん」リモコンカーを作ろう！』に挑戦しました。

リモコンカーの「あんどくん」は本体に淡路島の和紙を使っているほどの手の込みよう。さらにその内部は様々な部分が組み合わさって複雑そのもの。講師の先生もひとつひとつの作業を全員が終わっていることを確認しながら丁寧に進めていました。「かざぐるま」製作は最後に扇風機の風でかざぐるまを回して、発電されているのを確認。電球が光っているのを見たときの子どもたちの大きな歓声が忘れられません。

どちらのプログラムも子どもたちのリアクションがよく、非常によい雰囲気のなかで進められました。飯島事務局次長がおっしゃっていましたが、このような活動を通してものづくりの大切さ、大変さ、おもしろさを感じ、将来山梨県、日本を背負って立つエンジニアが生まれることを期待します。

コロナに負けるな！！
コロナ禍のなか少しずつ再開された活動！

①　夕涼み会　at 忍野幼稚園

７月２１日（木）の夏休みを前に、忍野幼稚園（朝比奈たかみ園長）で、子どもたちが１ヶ月前から計画し楽しみにしていた夕涼み会がおこなわれました。園内の飾り付けは子どもたちがアイデアを出し、みんなで作りました。いつもの遊戯室は手作りのレストランに変身。森をイメージしてつくりました。

まだ明るいうちに鳴沢村に行き、ブルーベリー狩りを体験。園に戻ってきてから先生たち手作りの縁日。おいしいかき氷をいただきました。夕食メニューは子どもたちが決め、調理に使われたジャガイモは畑で子どもたちが育てたものでした。夕食後はキャンプファイアー。火の神が登場して、点火されました。みんなで踊った後、花火師による花火大会。初夏の夜空をきれいに彩りました。

地域の消防団員さん、駐在さんに見守られ、先生方と共に安全に非常に配慮されていました。コロナ禍により、保護者の参加はありませんでしたが、子どもたちの見た大きな花火を家族の方々も家から見て、同じ気持ちで初夏のひとときを過ごした夕涼み会となりました。

②　盆踊り　at 月江寺幼稚園

７月２０日（水）に、月江寺幼稚園（天野治園長）にて盆踊り大会が開催されました。

当日は、お寺の本堂で年中・年長さんによる法要がおこなわれた後、境内での盆踊り。恐竜音頭、アンパンマン踊りで盛り上がりました。みんなの手拍子もぴったりと合い、練習の成果の出た、息の合った踊りでした。

PTA の皆さんによる手作り屋台が用意され、あめ・ラムネつかみ取り、宝物釣り、ヨーヨー、シャボン玉に子どもたちが並びました。最後はお父さんたちに準備してもらった花火大会で幕を閉じました。

マスク着用を徹底する中で行われた、コロナ禍対応の盆踊り大会でした。

③　夏祭り　　at　平野保育所

9月2日（金）に、平野保育所（遠山百合子所長）では、延期になっていた夏祭りが開催されました。例年、小学校と連携し、１年生も招待して行われていましたが、コロナ禍を考慮し、今年は園だけでの開催となりました。

朝、子どもたちは教室の中で待機していると、アンパンマンから夏祭りを楽しむための「お約束メッセージ」が放送で流れ、大盛り上がり。年の小さい子どもたちから順に教室から祭り会場へ移動すると、先生方手作りのお楽しみコーナー（釣りゲーム・玉入れ・スーパーボールすくい）が子どもたちを待ち受けていました。アンパンマンからの約束通り、マスク着用、密にならないように学年ごとに行動し、他の学年は教室で待機していました。また、小学校に兄弟のいる園児から、「運動会がんばってメッセージ」が小学校に渡されるそうです。

先生方の素敵なアイデアで祭りは大いに盛り上がりました。約束を守って行動した子どもたちにとっては最高の思い出となりました。

青藍幼稚園　～今年で１０年を迎えた自然体験教室

①　～　宝の山　自然体験　～

６月２８日（火）に青藍幼稚園（花園綾子園長）では、宝の山にて自然体験活動を行い、年長組２６名が参加しました。この体験活動は、「地元の自然を体いっぱい感じよう」「自分が感じたことを言葉で伝え合おう」「身の回りのことは自分でやろう」をねらいとして開催するもので、今年で１０年目を迎えます。

「山の中で危険なことは何ですか？」「クマ、イノシシ、ハチ」「ハチがいたらどうするんだっけ？」「体を低くする」宝の山職員や先生方が問いかけ、答えは子どもたちから導き出す。そうして全員で自然の中での約束事や注意力を養い、共有していきました。山道を遅れている友達がいた時は、子どもたちがお互いに声をかけ合い、安全を確認している姿も見られました。また、宝の山職員の方の指導の下、リュックのパッキングも実践しました。「ママにやってもらったー」から、「自分で出来るようになった！」の経験を少しずつ増やしていきました。

コロナ禍で活動が縮小しつつも、「生きる力」を自然体験の中から学んでいく貴重な活動となりました。

②　～　森と川の自然体験　～

８月２日（火）には、「森と川の自然体験」が行われました。年長さん２１名の参加による毎年恒例の川遊び。遊びとはいっても、宝の山指導員による川遊びの注意点と水の中での命の守り方の実技講習も兼ねた行事でした。園の体育実技指導員と先生方とともに川の浅瀬からやや深いところまで進み、声を掛け合いながら川遊びを楽しみました。

「こっちの方が安全だよ」「ここは滑らないから大丈夫」子どもたちは声を掛け合い、手を取り、深さを確かめながら安全なルートを見つけ、上流に登っていきます。網や箱眼鏡を持って水中の魚や虫を観察すると、ヤマメを見つけて大興奮でした。

森と川に囲まれた自然体験では、川遊びを通して水辺の注意点を学び、子どもたちはたくましく育って行くのでした。